

上京遺跡

てんきゅう

- 細川典厩邸跡の調査 -

http://www.kyoto-arc.or.jp
 (財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



室町時代後期の遺構（西から）



遺構分布図

はじめに 上京遺跡は室町幕府の中枢部である御所や貴族の邸宅、武家屋敷の建ち並ぶ中世の都市遺跡として、平成15年度に新たに登録されました。遺跡の範囲は、東は室町幕府三代将軍・足利義満の発願による相国寺境内、西は智恵光院通、南は平安京の北側に接し、北は上御霊前通に囲まれた1km四方・総面積約100haにおよぶ広大な遺跡です。

上京一帯に分布する室町幕府に関連する御所や邸宅跡の一部は、すでに重要遺跡として遺跡登録されていました。その主なものは、永徳元年（1381）足利義満によって造営された室町殿跡（花の御所）、五摂家の一つであった近衛家の別邸（桜御所）を中心とした同志社大学の新町校地遺跡、寛元三年

（1245）に一条実経の邸宅となった一条室町殿跡などです。これらの遺跡の調査を通じて、この付近には中・近世の遺構が良好に遺存していることが、しだいに明らかになってきました。

「上京遺跡」最初の調査 上京遺跡としての初めての調査が、平成16年8～9月にかけて上京区寺之内通新町西入ル妙顕寺町にある財団法人不審菴（表千家）の敷地で行なわれました。ここは上京遺跡の中央北寄りに位置しています。調査面積はわずか190㎡でしたが、室町時代後期の井戸や堀、土塼（ゴミ捨て穴）などの遺構を見つけることができました。

これらの遺構は2時期に分けることができます。古い時期の遺構は方位が北に対してやや西側に振

れるのが特徴で、調査区の東側で見つけた南北方向の溝と柵列によって敷地が東西に区分されているようです。西側の区画には大小の土塼が掘られており、中からは土器のかけらや、巻き貝の殻などが出土しています。

これに対して新しい時期の遺構には方位の振れがほとんどみられません。調査区のほぼ中央で東西方向の堀跡を見つけました。これは「布掘り」とよばれる、溝状に掘り窪めた掘形の中に礎石を並べて据え付け、柱の基部を埋め込む特殊な工法を用いています。堀跡は調査区の西側で南へ直角に折れ曲がっています。また、調査区の北側には並行して、やや小型ながら同様な基礎が見つかっており、この間が通路となっていたものと

考えています。また、調査区の南側では石組の井戸も見つかっています。

井戸や土壌からは多くの遺物も見つかりました。大半は土師器と呼ばれる素焼きの皿ですが、その他に施釉陶器（美濃・瀬戸）、焼締陶器（備前・信楽・常滑）、瓦質土器（奈良火鉢）など日本各地で生産された焼き物があり、中国からの輸入磁器（青磁・白磁）も認められます。また、茶臼とみられる石臼、刀に付属する筭、銭貨（宋銭）などもあります。

『洛中洛外図』から遺跡を読む調査で発見した遺構は室町時代後期のもですが、当時の上京の状況を具体的に示す資料として『洛中洛外図』があります。このうち「旧町田家本」は16世紀前半のもので、「上杉本」は16世紀中頃の作です。当時の街並みをかなり正確に描いていることが近年の研究で明らかになっています。この2つの屏風の左隻は、同じ構図で上京周辺を描いており、「小川」が北から南へ屈折しながら流れ、その周辺に武家屋敷や御所、民家が建ち並んでいる様子をうかがうことができます。

右の図は「旧町田家本」を参考に、現在の地形図に当時の街並みを小川の流れを手掛かりにして復元したものです。小川はその一部が水無瀬川となって現存していますが、昭和30年代に大半が埋め立てられ、現在は小川通と呼ばれる道路になっています。絵図では南流してきた小川が上立売通で東へ折れ曲がり、しばらくして再び南

へ折れ曲がっています。その屈曲した部分の北東の一角が室町幕府の管領細川氏（京兆家）の邸宅となっていて、その北側に隣接して典厩家があります。

細川典厩の邸宅 今回の調査区はまさにその典厩家の邸宅のほぼ中央にあたると考えられます。典厩家は細川氏の嫡家で、代々右馬頭を官途としたので馬寮の唐名である典厩と称されています。洛中洛外図によれば、典厩家の邸宅は東側に正面の棟門を設け、敷地の北側に柿葺の主殿や付属屋が並び、南側には庭石や樹木を配した庭園が広がっています。

調査区が狭いこともあって、発見した遺構が邸宅のどの部分にあたるかを知ることは困難です。ただ、古い時期の遺構の性格を知る1つの手がかりは、調査区の西側で見つかった大型の土壌群です。この中からは食器とみられる土器の破片や貝殻などの食物残渣がたくさん出土していて、その多くはゴ

ミ捨て穴であると考えられます。この付近は邸内でも日常生活に密着した空間でしょう。一方、布掘り基礎を持つ新しい時期の堀跡は、同様のものが新町校地遺跡でも見つかっています。邸内を区画する施設で、文献にみられる「鯖板堀」ではないかと想像しています。

出土遺物では土師器の皿がその大半を占めています。この状況は中世京都の他の遺跡と大きく異なるものではありません。ただ、そこに日本各地で生産した多種多様な土器や陶器類、中国製の陶磁器類が多く含まれること、さらにその中に精巧な模様のある青磁大皿などの優品が認められることは、この邸宅の主が有力者であったことを物語るものです。そして、茶臼や刀飾具の筭など当時の武家の生活習慣と密接に関係する遺物が出土したことは、当地が細川典厩の邸宅であるということを傍証していると考えています。

（吉崎 伸）



上京遺跡復元図と調査地